

■「ONE OUTS」作品解説■

『あらゆる野球漫画へのアンチテーゼとしてこの作品は作られています』(第2巻 作者コメントより)

優勝以外の数々のタイトルを獲得してきた「不運の天才打者」児島は沖縄である男と出会う。最高120キロのストレートだけを武器に賭野球「ワンナウト」で無敗を誇る男・渡久地。この出会いが球界の常識を超える伝説の幕開けとなる!? 果たしてリカオンズは優勝できるのか? そして「ワンナウト=500万円 1失点=5000万円」という「ワンナウト契約」をルールにして球団経営陣と勝負する渡久地。最後に微笑するのはどっちだ!

「……いつか 真正正銘の悪魔だ」



「失点につき10億円! 脅威の20倍レートが渡久地を追い詰める!」



敵球団までも利用するオーナー・彩川 その次なる陰謀が渡久地を襲う!



世界最速のベースボールランナー・ジョンソン 彼の予告ホームスチールに渡久地が取る手段は?



オーナー・彩川による非情の3連投命令 疲弊しきった渡久地が遂に打たれるが……

レートの球の回転を自由に変えること出来るという設定はどうして作ったのですか?

やっぱり武器が全く無いとさすがに説得力がないので、何か最低限の武器を与えたかったです。それでどんな武器にしようか考えたときに、プロ野球でも「なんでこんな球が打てないんだ!」って思うときがあるじゃないですか、フォークのようにスコーンと落ちるから空振りするのと違って、全然大した球じゃないのに空振りしたり、見逃したりする球、それがチェンジアップだったんです。チェンジアップって、カーブやシュートのように曲がったりするわけでもなく、ストレートの握りでゆるい球を投げるということが重要で、他の変化球と違って、変化の定義に関係のない球なんです。それが昔からすごく面白く感じて、「すごく」見えないけど「すごい」球というのが渡久地のキャラクターに似ているって思ってたんです。それからチェンジアップのことを調べていったんですけど、古本屋で見つけた野球入門書を見ると、昔のチェンジアップって、最近のサークルチェンジ(メジャーで一般的なチェンジアップの一種)のように特別な握りで抜く球を投げるんじゃなくて、ほぼストレートに近い握りで、相手がストレートを待っているとわかった瞬間に投げている途中で球を抜いていたんだとわかって、すごく投手の意思が反映された球だと思ったんです。普通、変化球を投げる時はキャッチャーが球を捕れるようにするため、サインを交わすんですけど、そこに投手の意思って存在しなくなるじゃないですか、しかも今ではチェンジアップにもサインがあるんですよ。でも渡久地は自分が試合をコントロールする立場であろうとしますし、当然投げる球には自分の意思しかないんで、そんな渡久地が投げられる球といえばストレートか、渡久地の意思でコントロールできる変化球、チェンジアップしかないと思ったんです。それで渡久地にふさわしい球として、チェンジアップを選んだんです。

勝負師という風情な、一匹狼のイメージがあるんですけど、最近の渡久地はチームの優勝のために動いているように見えるんですが、何か変化はあったんですか?

いや何も変わってなくて、なぜ彼がチームの優勝のために動いているかというと、沖縄の賭け野球で児島に負けた時、彼は腕を折る約束をしていたのに、児島がその腕を折らずに、チームのために活かしてくれ、優勝させてくれたって言われたからなんです。

勝負師である渡久地にとって最も屈辱なこと、負けたにも関わらず情けをかけられたこと、これを払拭するためには彼はチームを優勝させることしかないと、そのために動いているんです。

そんな渡久地の前に様々な選手が現れるんですが、一番印象に残ったのはジョンソンなんですが、彼の設定はどうして考えたんですか?

オープン戦以来、無失点を続ける渡久地に対して、策士・城丘監督が送り出した刺客は元陸上選手で30メートルならば世界最速の男・ジョンソンだった。世界最速のベースボールランナーの看板を掲げ、予告ホームスチールを決めるジョンソンとの対決に渡久地が仕掛けた大胆な作戦は……?

この話のアイデアは実話からなんです。僕はロッチファンで、ロッチファンはほとんどは知っていると思うんですが、昔、陸上の100Mで飯島という日本記録を出したことがある選手をロッチが走塁のエキスパートとして入団させたんですよ。結局全然ダメだったんですけど(飯島選手の生涯盗塁記録は成功23・失効17)、ロッチファンの一人として、そういう漫画みたいなことをロッチが真剣に考えていたことがすごく頭に残っていて、ぜひこの話をやりたいかったです(笑)。

僕自身、漫画の面白さって、「次にどうなるんだ」って、ドキドキする感覚だと思うんですけど、ジョンソンの話やマリナーズ戦の3連投の話はその点すごく惹き込まれました。無失点を続ける渡久地に対して、負債を重ねるオーナー・彩川は新たなワンナウト契約を渡久地に結ばせる。それはベンチの指示には必ず従うといった内容で、彩川はそれを理由に渡久地を最強軍団・マリナーズとの3連戦全てに予告先発させる。先発3戦目、疲弊しきった渡久地が遂にホームランを打たれ、初失点を喫するが、それは渡久地の仕掛けた巧妙な罠の始まりだった……!

マリナーズの面は本当にしんどかったです。読者から一体どんな反応が来るのか、ビクビクしながら描いていました。あのシリーズでは色々アイデアが出たんですけど、それを「面白い」と思うと同時に「やりすぎなんじゃないか」って、すごく悩みながら描いていました。だって現実を考えれば、大雨が降ることを見越して、試合の引き延ばしを図ったり、反則合戦を仕掛けたり、出来上がっている作品を読まれる読者の方とはともかく、作っている過程だと「ホントに

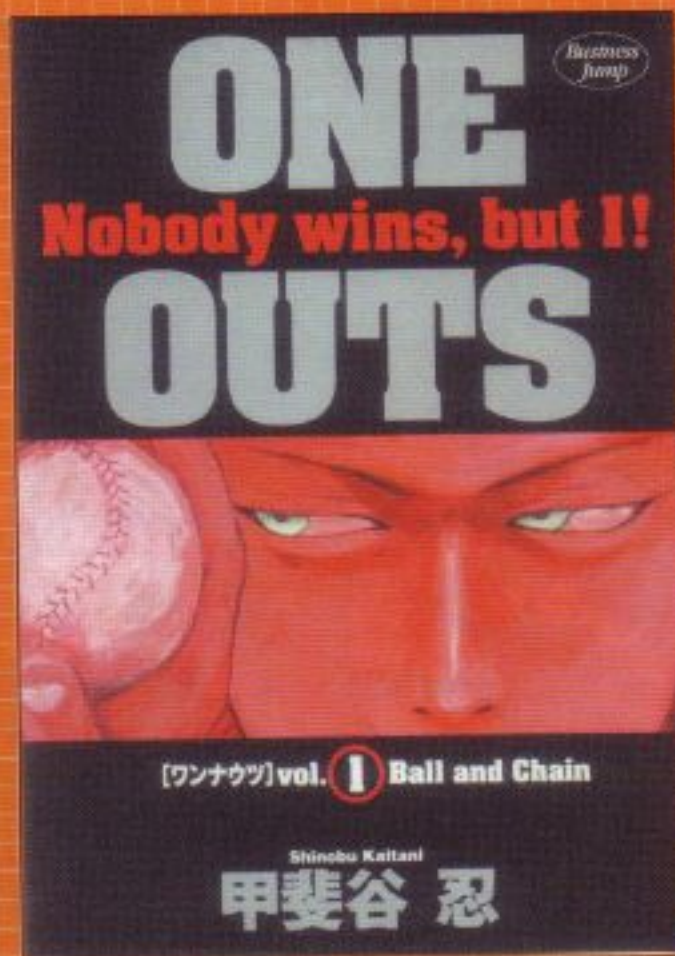
やっぴいかな?」「そんなのムリだろう」って悩んじゃうんですよ。

他の作家さんは知りませんが、僕はガッって描いた後でも、比較的醒めた気分で読み直しをするんですけど、あの時は「こんな描いちゃったけど大丈夫かな」って、正直、読者の方の反応が読めなかったんで、すごく不安でしたし、そういう意味では早く次のシリーズに行きたかった気持ちもありました。でもその一方で「これは面白いんじゃないか?」と思えるアイデアがあると描きたいのが漫画家ですから、「ヤバイ、ヤバイ」と思いつつも、止まらなかったんです(笑)。実はこのシリーズのアイデアが浮かんだ時、あえて何も言わずに担当の方に「この後どうします?」って聞いたんです。実際、担当の方が提案してくれたその後の展開のアイデアは「それはそれでアリだな」って思ったんですけど、それよりも僕のアイデアとすごいギャップがあることにビックリしてしまいました。だから「こんな言えないよな」って思いつつも、思い切って話したんですけど、その時はかなり緊張しました(笑)。でも実際に話してみると、担当の方も「面白いじゃないですか」「それで行きましょう」言ってくれたんで、始めることが出来たんです。マリナーズとの話は、はじめに担当さんと話を済ませていたことと、あと僕に聞こえていなかったかもしれないんですけど(笑)、読者の方から「こんなバカな話あるかよ!」みたいな否定的な反響がなかったことがだいぶ僕のことを救ってくれたと思います。それとおかげさまでここまでやっても大丈夫なんだと思えるようになったので、それは本当に良かったです。でももうあんな疲れる思いはしたくないですね、あんなムチャな話は1回の連載に1度で充分です(笑)。

最後に読者へのメッセージをお願いします。

野球を知らない方がどう思っているか気になるんです。最近の若い人って、野球をあまり知らないみたいなんで、その辺は最初からかなり意識して描いています。野球をあまり知らないという方も面白いと思ってもらえるように描いていますので、ぜひ敬遠しないで読んでください。

取材日:平成16年5月10日  
協力:ビジネスジャンプ編集部  
取材・構成:塚本浩司



「一球勝負なら 確実に殺すよ」  
新たに結ばれた「ワンナウト」契約。  
果たして渡久地の狙いは?

# 甲斐谷忍先生 インタビュ

なぜ「とらだよ。」にこの漫画を取り上げたのか、それは単純に「面白い」からです! 野球というスポーツを舞台にしていますが、この作品は主人公である渡久地東亜がその野球を通じて仕掛ける大博打に敵・味方はもちろん、我々読者までも騙し、作品の中に我々を巻き込ませる。そんな魅力があふれる作品です。今回はその「ONE OUTS」の作者である甲斐谷忍先生に取材してきました。渡久地の秘密に迫る貴重なインタビュー、ぜひご一読ください!

## 「ONE OUTS」甲斐谷忍

「ビジネスジャンプ」(集英社/毎月1日・15日発売)にて好評連載中!

コミックス第1~11巻(各530円・税込) 好評発売中!

甲斐谷忍先生ならびに「ONE OUTS」掲載誌

「ビジネスジャンプ」に関する最新情報はここでチェック!

<甲斐谷忍先生公式サイト「太平天国演義マニアックス」>

<http://www.tekipaki.jp/~taiheltengoku/>

<ビジネスジャンプ 公式サイト>

<http://bj.shueisha.co.jp/>



渡久地東亜

剛速球もすごい変化球もないこの男が球界に奇蹟を呼び起こす!? 相手の心理を読み取り、そしてコントロールする冷徹非常な意思の男・渡久地東亜。野球というゲームを通じて仕掛けられたこの偉大な大勝負。その結末は果たして?



彩川恒雄

東京彩球リカオズのオーナー。利益のためにはチームの勝敗も無視するワンマン経営者でもある彼の野望。それが渡久地、ワンナウト契約により燃らんだ渡久地への負債を解消するためにあらゆる手段を駆使するが、その結果は?



児島弘道

2回の三冠王をはじめ、数々のタイトルを獲得してきた彼にとり、失われたタイトル。それが優勝。渡久地との出会いにより、優勝するための何かをつかんだ彼は渡久地と引退を賭けた大勝負に出る。渡久地に勝つために彼が選んだ手段とは?



出口智志

リカオズの正捕手として、渡久地の女房役を務める彼だが、その真面目な性格の故か、よく渡久地に利用される。「敵を欺くにはまず味方から」を地でいく、ある意味で最も可哀想なキャラクターかもしれない彼の苦悶もこの作品の魅力です。

## ゲーム「ワンナウト」基本ルール

打者と投手の一対一の勝負。打者は四死球をとるか、打ち返した打球がインフィールドラインを、ノーバウンドで越えれば勝ち。その他は投手の勝ち。

## ワンナウト契約 基本条項

- 渡久地がアウトを1つ(ワンナウト)を取るごとに、球団は500万円を渡久地に支払う
  - 渡久地がマウンド上で点を取られた場合、渡久地は1点につき5000万円を球団に支払う。尚、この場合の失点は自責点であるか否かは関係なく、失点全てを指す。
  - 渡久地はベンチからのあらゆる指示に必ず従わなくてはならない。これに違反した場合、違約金として渡久地は5億円を球団に支払わなければならない。これは退場など本人の事情でベンチの意向に従えなくなった場合も含まれる。
  - 球団は試合によって、契約のレートを増減できる。このレートの変更は試合直前に渡久地に伝えられ、有効である。尚、レートを20倍に変更した場合、金額がワンナウト=1億円、1失点=10億円となる。
  - この契約についての一切を決して口外してはいけない。これに違反した場合、違約金として渡久地は5億円を球団に支払うとともにそれまでの年俸は無効となる。
- ※ 現在この契約による渡久地の暫定年俸 12億3333万円(90回終了時点)

編集:まずこの「ONE OUTS」を深く事になったきっかけを教えてください。

甲斐谷先生:野球漫画が好きだったので、漫画家になったときから、野球漫画を描きたいというのが目標だったんです。特にドカベンが好きで、かなり感化されましたし、ああいった漫画を描きたいと思いました。

それで漫画家になってから、野球漫画の企画をちょくちょく編集部には出していたんです。実際、「ONE OUTS」も3つ出した野球漫画企画のうちの一つだったんですけど、野球というゲームの中にキャンブルの要素が入るという意味で今迄になかった作品という事で「ONE OUTS」が始まることになったんです。

「ソムリエ」というTVドラマ(フジテレビ・主演:稲垣吾郎)にもなっていて、しかもかなり話題の高かったドラマ化作品の次ということでプレッシャーとかありませんでしたか?

プレッシャーはなかったです。こんなこと言っていけどどうかわからないんですけど、僕は「ソムリエ」がドラマになった時、「ある程度の実績を残した今なら自分の企画が編集部に通しやすいんじゃないか」って思ったんです(笑)。

実際、編集部がどう思っていたかはわかりませんが、勝手に「今がそのタイミングだ」って思っていたんで(笑)、プレッシャーというよりはこのチャンスを活かそうと、そればかり考えていました。

この作品に出てくる「ワンナウト」というゲームなんですけど、これは実際にあるゲームなんですか?

これは僕が小学校の時に遊んでいたゲームなんです。子供の頃に野球がしたくても人数が5人しかいない時があると三角ベースも出来ないじゃないですか。それでピッチャーとバッター、あと球を拾うヤツの3人だけで、しかも比較的狭い場所でも遊べるゲームという事で僕が考えたんです。実際キャッチャーもいないから、漫画に描いてある通り、壁にストライクゾーンの四角を描いたりしていたんですよ。

賭け野球の設定を作ったのはどうしてですか?

この作品は渡久地がプロ野球に入団してから本編なんですけど、それを始めるためには、どうして彼がプロ野球に入るようになったかという理由が必要だったんです。

アイデアの順番としてはワンナウト契約が最初で、気持ち的には最初に契約を結ぶ話(2巻収録)が第1話なんです。でも現実的に考えて、今のプロ野球でどこのどんなヤツかわからない人間が入団できるわけがないので、この沖繩の賭け野球の話を出すことで、彼のすごさというか、入団する理由を作ったかったんです。だから沖繩編の第1巻は第0話的存在なんですよ。

ワンナウト契約のワンナウトで500万円といった金額設定は結構考えたんですか?

かなりシミュレートしましたよ。現実の選手の成績や年俸との比較もしたんですけど、こんな試合になったら収支はどれくらいになるかとか、オーナーがショックを受けるにはどれくらいのマイナスが必要か、かなり考えました。20倍レートについては最初の契約で渡久地にどどんと稼がれて焦ったオーナーが契約のルールを変えていくという構想が最初からあったんで、その中の一つとして、レートの変更を考えていたんです。

やっぱりすごいピッチャーを出したいという考えがあったんでしょうか?

勝負師を出したかったんです。野球って、そういう世界ですし、その中でもピッチャーがワンマンというか、かなりピッチャーの力量に頼るところがサッカーやバレーと違って大きいゲームじゃないですか。

江夏(70年代に活躍した伝説の名投手)がノーヒットノーランで抑えて、しかも自分でサヨナラホームランまで打って勝負を決めた試合で「野球は一人で出来る」って言っちゃったことがありましたね(笑)。

そう、正にアレなんか究極ですよ(笑)。それが正しい姿かどうかは別にして現実を見ると、野球はそれだけピッチャーに責任が集中しているゲームです。そうした存在であるピッチャー、つまり勝負師にならなければならない問題提起する漫画として、この作品を描くことが出来ればと思っていたんです。だからその勝負師的な思想や、相手を欺くということを強く描くために、それ以外の要素、例えばものすごく速い球を投げる事が出来るとか、そういったものを全部排除したんです。そんなす

ごい武器よりも勝負師にはもっと必要なものが別にあるということ表現したかったんです。

実際にモデルにした選手っていらっしゃるんですか? ノリとしては麻重漫画のイメージなんですけど。

そのイメージであってはいませんが、はじめにこの「ONE OUTS」の企画を編集部に持っていったときに、「一言で言えばこの作品は野球版「アカギ」(「アカギ」:福本伸行先生による大傑作麻雀漫画)です」と言ったんです(笑)。

渡久地の背番号を77にしたのはどうしてですか?

最近の「ONE OUTS」を読んでいただければわかると思いますが、現実的に彼が監督みたくなっているんですけど、作品を描き始めたときから、彼がそうした存在になっていくだろうと思ったんで、野球でいう監督の番号、70番台や80番台の中で、ガンブラーらしい数字の7が二つある77番にしたんです。

髪型をはじめとしたルックスも特徴的ですよ

髪型には計算がありました。プロ野球を舞台にするんで、選手は帽子をかぶるじゃないですか。そうするとキャラの描き分けが難しいんですよ。でも主人公なんで、目立たせないといけないし、あと帽子をかぶっている時と取った時で印象が変わらない髪型にしたかったんです。これは他の野球漫画もそうだと思うんですけど、服装もユニフォームと同じですし、それに帽子をかぶるんで、もう髪型で目立たせるしかないんですよ。

ユニフォームといえば、どの球団にもモデルがあるようですけど、なぜリカオズのユニフォームは黄色なんですか?

そもそもリカオズというのが僕がやっていた草野球チームの名前で、そのユニフォームが黄色なんです。あとロッテファンなんで、劇中で一番強いという設定のチームの名前やユニフォームをロッテっぽくしましたね。やっぱりロッテにあんな最強打線がいれば気持ちいいじゃないですか(笑)。

渡久地の投げる球はストレートしかないんですけど、彼はそのスト